

◎一カ月前から、「山に行こう」と予定していた。相澤・前川・磯辺・岡村の4人参加。堀井さんも予定していたが急用で不参加になった。

◎剣尾山登山口に向かっている。茨木を朝8:00に出発した、9:00に能勢電鉄山下駅の磯辺宅に着き、彼を乗せて9:30登山口の駐車場にやってきた。「新しくできた 新名神に 乗ってみよう」と山手台を超え、“新名神”の看板に添って走った。茨木千題寺ICより600円、「おおきれい おおはやい」とはしゃぎながらすぐに川西ICに着いた。古いナビは右も左も言わないおかげで、反対方面に行ってしまうと時間的には地道を走ると違わない、1時間かかってしまった。今日は簡単な山、ハイキングコースの山、楽しくゆっくり登りましょう。

◎剣尾山の手前の山が行者山、名前の通り護摩壇があり石に何か彫られている。「タコの絵？」近づいてみると“不動明王”だった。「タコなんて 行者さんに しかられるよ」とふざけながら登り始めた。

◎大きな岩があちこちに、大きいといっても二階建て三階建ての家ぐらいの大きさの岩、これが何かの拍子に支えを失いゴロリ転げたら、下まで転げ落ちたら大事故だ。「石のささえをさわらないで なんの石だろうね ちょっと堅そう 花崗岩ではないよねえ」と話していたが、お堂の説明板に“花崗岩”と書かれている。ひとくちに花崗岩といっても、多少の違いがあるようだ、見て触って、説明を聞かなければわからないものだ。不動明王、役小角（えんのおずの）、護摩壇がならぶ。

◎今日は暖かい。前回まで、「大雪だ 大寒波だ」山に入るときは下着を着こみダウンにヤッケ、毛糸の帽子とネックウォーマー、手袋は二重の冬用だったが、今日は長そでのシャツ2枚、手袋も帽子もいらぬ。柴犬より少し大きいポチを同道したオヤジさん、「小さい時にもらった犬 かしこい いつもこいつと山に」と目を細めている。

◎石が積まれた炭焼き窯の跡、説明板に、「能勢の 三黒 牛・栗・炭 このあたりの炭は 池田炭と呼ばれ 茶湯に用いられている クヌギが使われている」そういえば上等の炭が採れると聞いたことがある。

◎このあたりの木々は、自然に生えたものが多そう。経10~20センチぐらいのひよろひよろ木が立ち並ぶ。どれがクヌギでどれがシイ、アカマツはわかるね。

◎六地藏を過ぎ、頂上の手前に月峯寺の遺跡がある。四角い石になんだか梵字、石の階段が、石垣が、井戸跡が、姿を見せている。埋もれていた遺跡を掘り出したものとか、1500年前から明治のころまであったとか、昔の人達のうごめきを感じられる、あちこちを歩き回る人達が見える。

◎剣尾山のとっぺんで昼食。自家製弁当とおにぎりをいただく。今回はここからもと来た道に戻ったが、今日は反時計回りにぐるり一周の予定、ここから先は未知の道、磁石と国土地理院地図を持ってきた。まずは北に進む。背丈ぐらいの細い石の道標がある。「明治十年 大阪・京都 国境 摂津・丹波」と書かれている。こんな重い石を下から運び上げたのかと驚き、昔の剛力はすごいものだ。北斜面は雪が少し残っている。雪を口にほおぼる、旨い。

◎左に折れ、北西に向かっている。先日恐れ入った話、大丈夫かなと怪しむ話、地図の話、方角の話だ。北は上だけれど右は東だと今まで普通にわかっていたものが怪しくなってきた、東は右だったのか左だったのかとばかげた話がいよいよやってきた。磁石をまずは置き、針をしっかりと北にあわせ、「おお 西がこっち 東がこっち・・・」とばかげた話である。向こうにポコリン、あれが横尾山かな。

◎とっぺんに三角点の石柱がある。「おお 三角点がある 一等だ」なんて話をよく聞いた。澤山さんも、「ここは 一等三角点だよ」などと喜んでいて、何を言っているのかわからなかったが、調べると、「登山愛好家には 一等三角点を踏破するのが目標 と山を楽しんでいる 人が多い」と書かれている。日本の有名な高い山に一等三角点が置かれたそうだ。「一等三角点を 登りつくしたぞ」ということだ。

◎「えええ あんなの 登るの」と下から見上げたが、「えええ もう着いたの」と簡単にとっぺんに到着、784Mだ。

◎反時計回りの一周、地図ではそう時間はかからないだろうと思っていたが、小さな上り下りがある、ごろごろ岩がある、こちらはハイキングコースというより多少斜度がきついな、岩々が面白い形で続き、高架鉄塔が谷を超す。

◎4時ごろに降りてきた、林道が見える、砂防ダムがある、駐車場が4時半に閉じるという、駐車場に着いたのが4時半だった。簡単に着替え少し上の温泉に。700円也。熱い湯だ。磯辺宅泊。鍋・ビール・酒、乾杯だあ。

展覧会の案内状DMに「最近 植物の絵を描きたい と思っている まだどう 描いていいのか 迷っている」と書いている。

EACEBOOK の書き込みに、「最近 ドローイングが 楽しい オレは このように かってに 決めている」

<ドローイング : drawing : 簡単な落書き絵>

<タブロウ : tableau(仏) : 真面目に描いた絵>

<sketch : えんぴつで落書き>

<dessin(仏) : えんぴつで真面目に描いた落書き> こんなふう勝手に決めている。

白いキャンバスに向かって、豚の硬い筆に絵の具をつけ、「ヘイ～ ホオ～」と線を入れる。次は平筆で水っぽい絵の具を刷く。もう一回、もう一回かな、できあがり、「ヘイ～ ホオ～」である。「真面目に 描いた 落書き」とは、いい言いまわしでしょう。

絵を描いて、「さあ できあがり」という、筆のおきどころがむづかしい、凡人の雑念、執着、妄想が、「いや まだまだ もっといいものができるかも」とオレを芥の荒野にいざなう、もうごみ箱からでられない、クモの糸に絡められ、引きも進みもできない自分を見つめる、こんなのは、やだねえ。

振り返ってみれば、ずっと永い間、“ひと”の絵を描いてきた。ひとの形、形態に興味があって、“ひとがなにかをしている”という絵を描いてきた。「もう ひとに こだわらなくても いいかな」と思うようになってきた。植物といってもその形をイキイキ表現するなんて、いまさらそんなこともしたくない、植物のもっている動きや、しなやかさや、あの肌合いは欲しい、と様々に迷っている。

「え 山の話 まだまだ 登るぞお」去年の夏、甲斐駒ヶ岳に登っている時に、「これが 最後かな」と思っていたら、八十歳の爺様がえっちら岩場を登り降りしている。頂上近くにいるということは、上に小屋のない甲斐駒ヶ岳、上まで登って下まで降りる。これはすごい、これは負けていられない、「まだまだ 登るぞお」ということである。「山の 何が 楽しいんだ」と問われると、そうですねえ、あそこに身を置いていることが素晴らしい、えっちらおっちら歩くことが楽しい。そのおまけが、山での弁当であり、水であり、アルコールなんです。そらあ、もちろん、景色はいい、空はきれい、生き物がいっぱいいる、一つの峠を登りきると世界が変わる、峠から尾根道を歩いていると、その別世界がどんどん展開する、季節が変わるたびに、その別世界も変化する、いいですよ、お見せしたいね。

「所詮絵なんて つきつめれば 画面を区切って 色を載せるだけ」「つきつめれば 色と形 人が造る 画像」宇宙の大空間、悠久の時間に比べると、小さい存在、吹っ飛ぶようなモノなのだ。とはいえ、絵に憑かれて、「ああでもない こうでもない」といまだに言っている。この歳になって悟ったことは、「悩んでいるとか 困っているとか 迷っているとか これがオレなんだ こんなことを言って 終わりが無い 完成もない ずっとこのまま これがオレなんだねえ」とわかってきた。幼児が騒ぐように、社会が日々動くように、毎日朝が来る、何も変わることなく、少しの事件や事故、欲望を満たす少しの褒美やおやつ、こんな事柄がちょっと騒々しいだけ、朝が昼になり夜になる。何をどうしようと、このサイクルは変わることがなく、昨日の次は今日、今日の次は明日、永遠に続く。その永遠の中に、オレの足跡が、七十年、八十年、存在するだけである。足跡なんて、恐竜の足跡化石でもない限り、ただのへこみだ。

図版は 今回の展覧会案内状に使った絵也。

NHK<日本人のはるかな旅>この本を読みながら、放送された画像は、さぞかし面白いものだっただろうと想像される。2000年ごろのようだ。人類は500万年前、アフリカで誕生した。最初の人類や猿人はやがて滅び、原人や旧人も姿を消した。現在の有力な説では、ホモサピエンスは20万年前に誕生し、10万年前ごろからアフリカを出発、世界各地に散った。大きな波のひとつはヨーロッパへ、もう一つはアジアへ向かった。

最初の日本人は、旧石器時代、シベリアからやってきた人、スンダランド（ジャワ・ボルネオ・マレー半島辺りにあった大陸）からやってきた人があったという。これまで長年にわたり、縄文文化は東日本が中心地だと考えられてきた。関東、東北、北海道、に遺跡が集中していた。1992年の三内丸山遺跡発掘の直後に、鹿児島や宮崎で旧石器、縄文の遺跡が次々姿を現し、それらの遺跡の発掘が驚きをもって迎えられた。最近はどんどん学問が発達して、今までのようにこの形式の石器は、この形の土器はと推定するばかりではなく、いろいろな計測技術が発達した。形態人類学という新しい学問、顔つき身体つきの話、生活様式、生活道具、これらを駆使して人の流れを探る。もうひとつは、DNAの研究、遺跡から掘り出された遺骨、化石から採取したDNAを調べる。

個人的な感想だけれど、最近の日本人、半世紀の間に顔つき身体つきが少し変わってきたのではと思う。矮小で、平べったい顔、こういう人ばかりでなくなった。細見長身で目鼻立ちの彫が深い、そういう人がたくさんいる。この身体つき顔つきなら世界のどこに行っても、極東の小国の人だなんて思わないかもしれない。

百年前の1928年ころ、シベリア：マリタ遺跡をはじめ、200ほどの遺跡が発見された。2,3万年前のヒトのものだ。日本の縄文人の遺骨のDNAと比較すると、アジアの各地の人の中で、シベリア平原の人のDNAが一番多く似ていた。シベリアにだけ存在した細羽石と呼ばれる鋭利な石器が、シベリア遺跡時代より1000年後の北海道の遺跡で発掘された。縄文時代以前にシベリアに住んでいたヒトが日本列島にやってきたと思われる。氷河期のシベリア、冬は寒いが夏は草が生い茂りマンモス、ケサイ、ホラアナライオン、バイソン、ジャコーウシが住んでいた。2万年前の最終氷期にシベリアに大寒波が襲い、寒さを嫌って動物も南下した。地球の水面は氷結により100Mも下がり北海道は陸続きになった。水深140Mの津軽海峡も一部が凍結したのではないのか、歩いて渡れたのではと思われる。ただ日本には食料となる動物は少なく、温暖化が進み草原が森林になった。ヒトが土器を発明し木の実が食べられることを知った。東京新宿にある遺跡にも、2.5万年前の住居遺跡がある。

南九州独特の縄文文化とはどんなものだったのか。

◎最古の船造り道具：丸ノミ形石斧（世界最古の船造り用道具）が1,2万年前の遺跡から出土している。丸木舟を造る道具で、南九州地域に見られ、海洋民族の人々がいたと言われている。

◎石蒸し焼き：住居跡の周囲から石を集めるなどして作った、野外調理施設があり、諸説はあるが、石蒸し焼きの炉跡とみられている。ポリネシアなど南太平洋の島々で多く見られる調理施設だ。

◎燻製施設：地面に掘られたふたつの穴の奥がトンネル状につながっている。「連結土坑」などと呼ばれ、燻製加工施設だと考えられる。トンネル内土中から動物の油脂が検出され、イノシシや魚などを燻したとみられる。試してみるとみごとに燻製が完成した。

いまネットで調べると、最近の発見で、沖縄では石器時代の人骨がたくさん発掘されているらしい。火山灰の混じる土壌では骨は溶けて残らないが、沖縄は石灰岩が分布しており、遺骨が残りやすい。3,6万年前と推定される山下洞人、石垣島で19体の旧石器人遺骨発掘、そんな話が載っている。出土遺骨から、顔の復元をしてみると、東アジア太平洋で動き回っていた人々の可能性がある。ジャワ島は人骨化石が多い、110万年前のジャワ原人も発見されている。2万年前の最終氷期には北半球に大氷河があり、ニューヨーク付近まで氷に覆われていた。その結果広い大陸棚の東南アジアは陸続きで、古代大陸「スンダランド」と呼ばれている、そこに人が住んでいたのだ。

雪の中、たっぷり歩いてみたいとひとりで出かけた。JR 茨木駅で山仲間の福田さんに声をかけられた。「今から岐阜へ 商談」だそうだ。天気予報は登山に最適、暖かいという、サングラスを忘れたのが気にかかる。

◎9:21 北小松駅を出発。駅で降りたのはオレひとり、淋しい駅だ。電車の窓から見ていたが、比叡山にはもう雪は残っていない、比良も上の方にも雪は少しあるだけだ。ネット情報ではスキー場は営業していると出ている。ザックにはピッケル・アイゼン・ワカンが入っている、もういらなかったとなるかならないか。今日は、JR 北小松駅から北比良峠、そこから下って JR 比良駅から帰るというコース、好きで何度も来ている。“揚梅の滝”という登山口まで、「すぐだ」「5分か10分」と思っていたが、計ってみると25分もかかっている、若い頃の活力はすごいものだねえ。

◎10:31 涼峠に到着、汗が出る、熱い、風は冷たい、6度Cだ。「2年前は1時間でこれかな」この少し下が、水が流れ石を削り、V字形の3Mぐらい深いの溝になっている。花崗岩なのか、砂に風化しているのか、地球の形だ。持参の自作サンドイッチをほおぼった、ひとりではさびしいねと、鈴を出した。音が大きいので都会ではザックにしまっている、りんりんいい音だ。次の、ヤケ山の標識の所でスパッツを着けた、ぼちぼち雪が出てきた。ここから北の方角、あれは蛇谷が岳、ふもとに寺院の屋根、音羽とか黒谷とか出ている。雪が厚くなってきた、雪の中に手袋を入れてバランスをとっていたが濡れて冷たい。次にピッケルをザックから出し、雪に突き刺しバランスをとる、これで歩きやすい。最近の若者は、ストックばかり、ピッケルを持つ人は少なくなってきたのかねえ。

◎12:39 やけお山に到着。5人の方々が食事中。下のやけ山とこことはどういう関係だろうね、「おっぼ？」と声が聞こえたが、調べても出てこなかった。釈迦が見えるもうすぐだ、琵琶湖がまる見え、大橋も、湖のすぼまったところも。湖東の山が連なっている、どんより曇った空、山並みの上だけが明るい、うす紫なのか、黄が、オレンジが、混じっているのか、どんより黒いところにきれいなグラデーション。ここまで来ると雪はだいぶ深い。

◎釈迦直下、ひとりで下ってきた人とすれ違った、どこから登ってきたのか、恰好いい服装とゴーグルだが、ジイサマは隠せない。向こうも思っているかな、「ジジイと 釈迦で会った オレより 上か下か 雪山でひとり は あぶねえ」

◎1:20 釈迦到着、4時間もかかった、雪もあつたが、年だねえ、1時間も余分にかかっている。「おお たっぷり雪ゆき山だ 幹に枝に氷が これが見たかった」、遅い昼飯を食う。各ピッチでパンをほおぼってきたので、ハラヘリ状態はない、弁当はいつものご飯に梅干、野菜炒め、玉子焼きである、寒いので、早々に食って歩き出した。

◎1:35 出発、雪で真っ白の中、踏み跡がかすかに残っている。今日は誰も歩いていないのかな、さっきすれ違ったジイサマは、大津ワングル道からシャカにきたのかな、とりあえず向こうに見える電波塔を目差せば間違いはない。

◎このあたりは今まで気にしなかったが、大きな木がある。まずブナ、精霊が宿るには百年早いと生意気なことをいうが、堂々とした姿のブナ、ミズナラ、赤い幹は何の木だ、シャラじゃないよねえ。木がいいね、寒いね、冬用手袋にネックウオーマー、ぼお~っとしながら歩いていたが、「ちょっと待てよ 道を間違えているぞ 前に北比良峠が見えるが まっすぐ行くと 落ち込んでいる・・」道を間違えたようだ、多分これはかつてケーブルの乗換駅があったところから降りる道か、知らないところはよろしくない引き返した。道はあるかとバックした。「これだ 少し下がっているが これであってくれ しばらくたどると左に 見覚えのあるガレバ 見覚えのある土砂崩れ これだこれだ」

◎2:36 北比良峠に到着した、30分ほどロスをしたようだ。記念撮影、ひとり撮影、タイマー撮影だ。昔はこのあたり、スキー場があり、宿泊施設があり、公衆トイレがあり、売店があり、人がたくさんいた。今はひとつこひとりいない、モノクロの世界、琵琶湖が見える。踏み跡はあるが今日のものかな。

◎3:30 下りの途中で小休止。ビスケットを2袋、1.5Lのスポーツドリンクも半分以上飲んだ。帰りの林道でドーナツを食おう、それで今日の食料は終わりだ。とはいえ非常用チョコレートがいくつかザックにある。今日の雪は歩きやすい、足がもぐることもなく、硬くて滑ることもなく、下りはかかとかがぐさりと刺さり、快適な歩行ができる。この時期になってやっと今年の雪山が歩けた、嬉しい限り。どうも今年はアイゼン仕様ゼロだねえ。

◎4:10 やっと川まで降りてきた。ここで濡れたシャツを脱いで新しいものに着替えた。スパッツ、手袋、ピッケルをザックにしまい、水を飲んで、ドーナツを食った。6人のグループが同じように着替えていた。今日は、やけお山の5人、ゴーグルのジイサマ、この6人、なんと老人ばかりだった。5:30 比良発の電車で帰宅は7時だった。

瀧川政次郎著<諸国宿駅のクグツ-江口・神崎-遊行女婦・傀儡女>傀儡子はクグツと訓むことになっているが、傀儡子という漢語の原義と、クグツなる日本語の原義とは全く異なっている。傀儡子をクグツと訓むのは、百日紅をサルスベリと訓むようなものである。

◎これは何のことだとよく読むと、日本語のクグツはクグとい草で編んだ籠のことだそう。漢語の傀儡子は人形を舞わせて歌う、デコマワシのこと。朝鮮から渡来した白丁民は朝鮮に居た時は柳行李に人形を入れ、それを担ぎ諸方で人形を舞わしながら、山野を漂泊していた。日本では柳行李の材料が得られないのでクグという草を代用した。

◎日本でフクロカツギビト（ヤッコ）が賤称であるように、朝鮮でもクグトカツギビトは賤称である。日本人は人種的偏見の最も少ない民族である。まして、朝鮮からの渡来人が賤民であってもさほど差別はなかった。夙（中世・近世にかけて、主に近畿地方に住み、賤民視された人々。-この言葉は初めて知った）が穢多を賤視し差別することは、常民が穢多を賤視し差別するよりも更に酷烈である。傀儡子族に対する賤視は、常民よりも日本に渡来した帰化朝鮮人の方が強かったと思う。

◎傀儡子族すなわち白丁民は、男は山野を彷徨しているときは獵師であるが、人里に来たときは芸能人である。人形を舞わすことが主な芸能なので、デコマワシといってよい。女は媚を売るから遊女である。室町以降、巫女も売色をしたので、クグツと呼ばれた。

◎傀儡子族は朝鮮にいる時から、狩猟・芸能・売色によって生を営んでいた。白丁民が日本に渡来して傀儡子族となってから変わったことは、人形と、柳行李からクグツ籠に変わったぐらいである。

◎売色をするクグツは、旅行者を最大の顧客とする。奈良時代には難波が交通の要衝であり、その後、難波はさびれ、江口・神崎が日本で一番の交通量の多い河港になって、クグツと呼ばれる遊女が集まった。

◎平安時代の旅館の発達で、クグツが定住するようになり、クグツという名称が廃れた。しかし傀儡子族のあるものは依然として漂泊生活をつづけた。それが明治大正時代まで残存し、サンカと呼ばれた。

◎キジヤと呼ばれる漂泊民がいる。深山幽谷を渡り歩き、ろくろを踏んで木地を作ることを生業としている。明治以降彼らの漂泊性は終息したようだがその習性は今の名残りを留めている。一般常民と通婚しない、特殊な信仰、こけしを造る、などから、傀儡子族の一派ではないのかと思うが、その論証を期したい。

◎あとあと、歌がどんどん紹介されるが、歌はわからない、なじみがないので省略。

盛田嘉徳著<中世賤民と雑芸能の研究-虐げられた人々>

◎人が住めるところではない河原に、住みつく人々がでてきたのはいつごろからか。1016年「左経記」道長の時代に、河原に住んで斃牛馬を解き、皮革を扱うことを生業とするものがいた。多量の流木と広い干場を必要とする皮なめしの作業、死骸を河原にほおむる習慣、渡し守や関守などが河原に住みついた。

◎中世における賤民の実態はまことに複雑多岐を窮め、それが相互に複合重層しあっている。それぞれについて明確な識別をなすことは容易でないが、そうした賤民群の中でも散所のものと河原のものは、二大主流を形成していた。

◎散所：寺社権門に頼って漂泊流浪の難民が多く流入し、そこを卑賤視することが強くなっていった。散所法師の徒は、一面、遊芸の徒であった。田楽、猿楽、曲舞（くせまい）、千秋萬歳（せんずまんざい）などの中世的諸芸能は、散所の特権的職種のひとつであって、中世には一応の完成を見た。

◎河原に住む人々は、差別と貧困に苦しめられながら、日々の糧を得るために、仕事の選り好みをしている余裕がまったくなかった。キヨメ（清掃人夫）の仕事は、河原ものの重要な仕事のひとつになっていった。それが特権となって死牛馬の取得権として残った。

◎不毛の河原に住んでいた人々にとって、古くからある河原の職業に参加できなかった人々は、生きていく手立ては自らの肉体を元手に、日雇いの雑労働をやるか、行商をやるか、低俗な雑芸能によって物乞いするか・。井戸掘り、石組、屋根ふき、壁塗り、竈塗り・。犬追物に使う犬の捕獲。足軽・河原ものも、戦場にもかりだされた。

◎犯人の追補、囚人の監視、護送、刑の執行などの義務労役を負わされた。

◎展覧会前の今日、比良方面：釣瓶岳登山にやってきた。朝5時に起き7時前に茨木ICを出発した。京都東から途中を通り朽木方面に向かった。“栃生”と書いて“とちゅう”と読むらしいバス停のあるところに車を止めた。麓にトチがいくつかあったが、山の上にはなかった。

◎2月の初旬に釣瓶岳近所の“蛇谷が岳”に登った。その時は朽木へ行く街道はマイナス9度でノーマルタイヤでは走れなかったが、今日は5度、街道には冬に撒かれた“エンカル”の白い粒があるだけだった。

◎8:15 登山口。釣瓶岳の標識に“コメカイ道”と書いてある。このあたり、今でこそ多少開けた場所もあるが、葛川を挟んで急峻な地域、琵琶湖側の水田地帯に、米を買いに行かなければならない生活を強いられた地域なのかな。米を買うためにこのあたりの人は、猟で獲れた獲物、薪炭、などを担いでいったのかもしれない。廃屋が二軒三軒、発電用施設のような水路がある。明治大正を思わせるレンガ造り水路、当時、発電には力を入れていたんだねえ。

◎標識がある、三差路だ。左は地蔵岳からコメカイ道の続きのようだ。右が今日の目的地、釣瓶岳と記されている。このあたりはアカマツが多い、立派なでかいアカマツだ。先日読んだ里山という本に、地域の人が樹々の幹・枝・葉っぱ・下草を利用した。建築用材に、薪炭に、肥料に使ったそうだ。アカマツは利用するのに都合のいい木だった。

◎向こうに釈迦岳・武奈ヶ岳が見えてきた。そのてっぺんはまだまだ白い、まだまだ寒そう。ここは武奈のてっぺんより500Mは下だろう。アカマツの太い幹にキズと穴、これはクマではなくて、クマゲラかねえ。

◎9:42 また三差路に出た。左が笹峠となっている、高島の方に行っているようだ。一世紀前までは住民の道だった。

◎早春の山、晴れている、暖かい、気持ちがいい、所々にダンブカー一杯分の雪をぶちまけたように白く残っている。どんぐりの実もたくさん落ちていて。彼らも春を感じたのか、かたい殻を割り白い中身が見える、白い実に、かすかに赤や緑が見え隠れする、恥ずかしそうなその色は春の芽吹きか。まもなく鳥や獣が這いずり回り食っていくのか。

◎10:31 イクワタ峠到着。目的の釣瓶岳が目の前に見えてきた、もうワンピッチで登れそう、ここも雪が多い。この山はいい、景色がいい、感じがいい、気持ちがいい、大庭園を散策する気分である。高島トレイルの北は雪だらけ。

◎こんな季節に茶色まだらの蝶、ヒラヒラ。まだ枯れ枝のままの大木の枝に、丸いぼんぼりが二つ三つ。植生植物、鳥が実をついばみ、木の枝で糞と一緒に種を落とす、種が育ってぼんぼりになる、春になると葉っぱどうし競争だね。

◎オオカメノキ・ブナ・カエデ・リョーブ・花がまだのマンサク・・・。雪を踏みしめて登る。

◎11:34 釣瓶岳頂上1098Mに到着。てっぺん付近にスギの自然林、植林の木に比べ姿は整っていないが、太く短く堂々としている。反対の斜面はブナが多い、立派な若木もいる。

◎一週間前の朝突然の嘔吐と下痢、「なんだ これ・・・」30時間前に友人たちとジャンジャン横丁で串カツとすしを食った、「あたってか 生牡蠣か ナマコか・・・」半日寝ていた。「風邪かもしれない・・・」と薬を飲んでまた寝た。「風邪と思ったら すぐ薬 すぐに飲んだら すぐに治る すぐよ」と山仲間の看護婦さん、前川さんからいわれ、それを実行している。いつもはのどが痛くなる、ちょっとでも痛いと思ったら一服飲む、それで事なきを得ていた、言うとおりでである。今回も薬が効いたのか、眠ったのがよかったのか、症状は徐々におさまってきたが、食欲と体力がない、こんなことで山に登れるのか、まもなく展覧会がこなせるのか。

◎昼食、いつもの弁当を広げた。脂っこいものは要らないので、玄米ご飯に梅干、野菜の煮物をいつもより少なめに詰めてきた。いつも“ハラヘリ”のオレがサンドイッチは半分しか食えない、弁当も少なめ、帰りの道中も用意してきたパンを食べなかった。幸いなことに翌日から治ってきて、これを書いている今は完全復帰、大いに食べている。

◎今回は大きく時計回りの山行ということで、下りは釣瓶岳からブナの方に進んで一つ目の尾根を左に曲がって下った。山の地図には載っていないが、いつもの赤テープではなく、青テープの印がしてある。急な下りだが、立って歩ける程度の急さである。

◎今日は朽ちかけた大木、枯れた大木がたくさん目についた。こういう大木、好きだねえ。

◎モミの木がいくつかある、大きい、高い、上の方に緑の葉っぱ、そうだこの木は針葉樹なのだ。

◎ほとんど山裾に、発電用水路が葛川と並行して走っている。近代工事のたまものか、トンネルをくぐり、普通に山裾に顔を出し、所によっては水道橋までである。水路が顔を出しているところを避けて下ってきた。

◎展覧会が終わって二日が経った、「いやあ つかれた・・・」である。ここ何回かの展覧会では、始まる直前までねじり鉢巻きで汗水たらす、というようなことはなくなった。「大丈夫 いい絵が たくさんある よりどりみどりで たくさんの中から 選び出せばいい」そんな様子で普段通りに絵を描いていた。半月前になれば、「積んである 束の中から 出品作品を 選べばいい」とぐずぐずしていた。一週間前になってパネル張り、簡単額装をはじめた。金づち、ねじ回し、ノコギリなどを出し、一枚一枚始めた時に、ちょっとあせりましたね。「わわわ この作業が 一番大変 じゃまくさい へたくそ 時間がかかる 描いている方が ずっと楽 ずっと楽しい」それこそ飾りつけの日直前までねじり鉢巻きで、簡単額装の作業時間でした。3号が3万円、6号が5万円、というディスカウントなので、「額までは 注文つけないで」と思う反面、「多少とも きれいにして 渡さねば」とも思い終わった今、反省しております。

◎17日：土曜日「12時に画廊で待ってます」車に絵を積み込み向かった。「え 工事・・・」なんとビルの前は通行止めで足場を組んでいるまっ最中、「え 展覧会ができるの・・・」目が天になった。「ごめんね」木村ママが電車で到着、「鉄骨パイプが 落ちませんよう」と祈りながら絵を画廊に運び入れた。なんと向こうから三宅さんが歩いてきた、「間違えたんじゃない・・・?」「手伝って」飾りつけには3時間かかった。木村ママから鍵を預かった。

◎一日目が終わって家に帰り着いた。会期中は飲まない、金曜日のパーティだけ飲むぞ、と決めているので、7時ころには帰宅。鍵は木村ママから、「使って」と何年か前から、会期中預かり画廊の開閉をしている。服を脱ぎながら、「鍵がない」「まさか・・・」「落としてはいけない 持って行くのを忘れてはいけない」小さい黒猫の付いた鍵に、赤い糸までつけ、財布に括りつけていたがその糸がゆるかったのか、ほどけてなくなっている。ポケット、カバンを探り、「落とした えらいことだ」さとした。ネットで阪急電車遺失物係を調べ、茨木駅、南方駅を調べてもらったが、「この時間には 届け出はない 明日午後 梅田駅に問い合わせしてくれ」という返事。木村ママに電話で謝り、「ビルの人に 開けてもらえばいい」と返事をもらった。「まさかまさか・・・」と寝苦しい朝を迎え、茨木駅、南方駅で聞き込み鍵がないことを確かめた。南方駅からは昨夜の帰り道を逆にたどった。「あ！」あつた、昨夜歩きながら財布を出して回数券を出していた、その時に道路に落としたようで、どなたかがそばの石の上に置いてくれている、大感激である。

◎先日、富山の雪かきは何回目かなと調べたら8回目だった。シエスタでの展覧会も8回目だ。木村ママが毎回花を飾ってくれる。「絵の邪魔にならないよう 色をおさえた花を 選んでいる」この花は素晴らしい。

◎なんと今回は、月曜から木曜まで雨模様で冬に近い寒さが襲っている。この一週間冬のダウンを羽織って通った。「お天気が良く いいですねえ」という言葉はよく聞くが、「雨が続いて いやだねえ」とは聞きたくない。天候のことは如何ともし難い。毎年この時期は花の季節でもある、一月二月はモノクロの世界に二三の花が咲くが、三月になるといくつもの花が、いくつもの色が、大輪が、表れるが見向きもせず展覧会業に専念する時間だ。

◎昨日季節外れの大雪で、関東方面では道路が渋滞したところがあるという。大阪も寒い。

◎毎日1時間早く画廊に入る。いつもはアトリエでちょっと絵を描き、河原に出て走ってもいた、今回は会期中、ビールが1回、走りが3回だったかな。朝の画廊の鍵を開け、「毎日ご苦労さん」と絵に挨拶をするも返事はない。ライト、暖房、音楽、コーヒー沸かしとこまめに動き、人を待つ。1500枚の案内状を使い切ったが、来てくれるのは100人ちょっとぐらいかな。「売れた?」「もちろん おおいに がはは ちょっと絵の具が 買えるかな・・・」

◎オレは今71歳。半年先には72歳になる。「仲間が 老いてきている」と実感している。オレはまだ、「河原だ 山だ」といっているが、「歩けない 出かけられない 病気と闘っている もう負けそうだ」という人たちが増えてきた。「え あいつが 入院・・・」「会場まで出かけられない・・・」そんな仲間のエネルギーに満ちた顔が思い浮かぶ。

◎この画廊の一番いいところは、ゆったりした会場、ゆっくりコーヒーを飲んでもらえる、そして、パーティができるところだ。普通の常識では、たいがいの画廊では、オープニングパーティをやる、パーティは初日にやっているが、オレは最終日の前日に決めている、初日の夜に酒を飲むと身体も心も疲れるからだ。聞いた話では画廊には絵描きの友人は来ない、来てもらいたくない、何故なら彼らは絵を購買する客にはならず、むしろ絵を売る商売を邪魔する傾向にある。というようなことで、パーティに友人を呼んで大いに飲んでもらい、翌日からの展覧会には顔を出すなという画廊の方針、策略だとか聞いたことがある。いずれにしろ、仲間が来てくれることは素晴らしい。